

164
12

勝 諺 藏 著作
脚 演 本 劇
楠 公 遺 訓 軍 歌 譽

全 七 册

088705-000-3

特52-607

楠公遺訓軍歌譽

勝 諺藏 / 著

M26

DBJ-0364

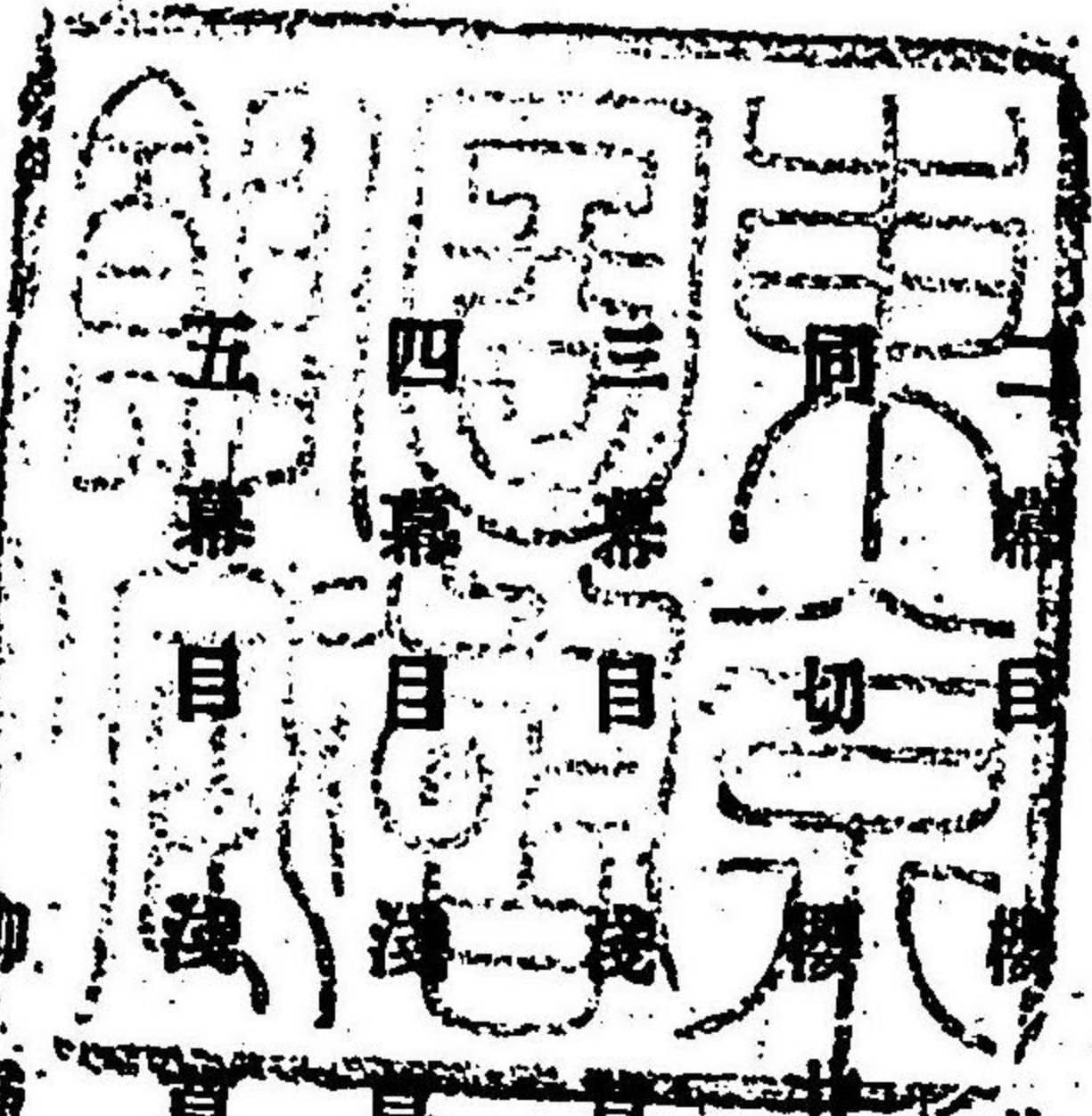


演劇本 楠公遺訓軍歌 幕

場割

序幕

神戸楠公社内の場
有馬道四つ角の場



大詰

柳橋於千代内の場
兩國牛肉見世の場
小梅村別荘の場



演劇本楠公遺訓軍歌

序幕

役人替名

- 一車 夫 御前吉
- 一小 僧 三吉
- 一玉田 手代 與七
- 一香 拔 の 段 平
- 一蛙 の 才 六
- 一茶 店 娘 お仙
- 一下 女 お龜
- 一豊 田 六左衛門
- 一玉 田 娘 お類
- 一豊 田 僕 貞介
- 仕 出 二 人

一 神戸楠公社内の場

本舞臺平舞臺見附石の玉垣石燈籠茶店揚弓屋の入口易者の店を見せ都て楠公社内の体爰に參詣の仕出茶を喫み居るお仙茶店娘の拵らへにて立かゝり居る此見得通り神樂揚弓の音にて幕明く」

○「福原と極つたら部家のふさがらぬ内早く行う」 △「さうじや行う」
 「お仙「おいらんに宜敷く」ト仕出しは下手へ這入る向ふより手代與七提灯を持ち豊田六左衛門娘お類下女お龜小僧三吉附添出て來り」 六左衛門「此賑かさはとんと東京の淺草

の様だ」 與七「旦那様マアあれへお越し遊ばして」 お龜「一服召上り升せ」 六「ナ

、夫がよからう」ト皆々舞臺へ來り床机にかける」 仙「マアお一つお上りなされ升せ」ト

茶を汲で出す」 六「時にお類殿親御が早速の御承知で斯く結納の印迄頂戴致し今夜は東京を出てから始めていゝ心持で旅の枕に就き升る」 お類「何から何迄お取成しお嬉しう

ムり升る」 六「妹は西洋諸國で之貴顯方の令嬢は皆軍人の色の黒いと愛するといふ事だ
 が此豊田の甥の黒い陸軍少尉で通用の出来る色の黒い軍人だ」 お龜「夫では西洋では色

の黒いのがよいのでムり升るか」 六「さうだ」ト向ふより御前吉車夫の拵らへ提灯
 を持ち豊田の僕お類屋の貸下駄を履き出て來り」 御前吉「モシ旦那向ふが楠公の本

社でムり升る」 眞介「ヤモウ東京で話しに聞たより中々立派ぢや」 吉「マア愛で一服
 してお出なさい升せ」 仙「いらつしやい升せ」 六「其處へ來たのは貞介でとないか」

眞「ナ、あなた旦那様か」 眞介「モシ車杯には乗りや致し升せんあなたのお迎ひに參り升て
 ムり升る」 六「何も左様の事は尋ねておらぬ正直な者ちや彌操と縁談が調ふて」 眞

夫はお目出度うムり升る」 六「そちが迎ひに來たを幸ひ大切な指環を貴様に預けるに因
 て是を持って先へ宿へ歸つがよい」 眞「夫でと私はお先へ歸つており升る」ト指環を受取

り」 眞「モシ旦那様今度の結納は此指環でムり升るか」 六「さうぢや總て婚禮の式を

西洋風でするので夫でそれが結納ぢや其指環は金剛石が入つて居る高金な物故大切に
 持て歸つたがよい」 眞「〜い〜大事に持て歸り升る」ト向ふへ這入る」 眞「あのお
 供さんは中々正直なお人だ」 六「夫ではお類殿」 眞「伯父様參詣をして來升せう」
 三「サアいらつしやい升せ」ト上手へ這入る」 眞「ドレ床机を片附けて休み升せう
 が」ト道具を片附け内へ這入る向ふより吞抜の段平巾着切の拵らへにて以前の指環を持ち
 走り出て來り上手へ這入る跡より貞介追欠け出て來り」 眞「すりざ〜泥坊だ〜」ト
 いびながら舞臺へ來る跡より蛙の才六相すりの拵らへにて出て來り貞介を捕らへ」 六「
 サイおめへさん何うしたのだ〜」 眞「今すられ升たすりだ〜」 六「オエ、靜かにな
 さ〜」ト隙取らせて上手へ走り這入る」 眞「エ、何うせう〜結納のあの指環夫も高金
 の品とやらすられたは此身の災難寧ろ淵川へ身を投げて死より外に思案はない〇イヤ〜
 今死では指環の行衛が知れなくなつた其上に此貞介が窃取り出奔したと思はれては猶々且
 那へ濟まぬ譯コリヤ何うしたものであらう今から直ぐに漕船にて東京へ着て後此始末を操
 様へお話し申て夫から死うア、ゑらい事を」ト腕を組むが道具替りの知らせ」 眞「仕出
 かしたなア」ト愁ひの模様宜敷く合方にて道具ぶんどす

神戸有馬道四つ角の場

本舞臺町家の四つ角を見せ爰に街燈郵便管を据へ都て有馬道の体以前の吉車に腰を掛け客
 待として居る此模様時の太鼓合方にて道具納る」ト段平才六指環を持ち走り出て來り」
 段才「兄貴か」 御前「エ、靜かにしろ」ト明りを吹消し」 眞「能くやつたか」 段才「ソ
 ヲおめへの注文は此指環だらう」ト受取見て」 眞「ム、是だ〜金にした上で幾らか割を
 附けてやらう」 段才「そいつは有難へ」ト上手より貞介走り出て來り御前吉に行當る」
 眞「エ、おつた」 眞「ハイ御免下さい」 眞「氣を附ける」トいひながら指環を懐ろ
 へ隠すが木の頭」 段才「飛んだ周章者だ」 眞「御免下さい」ト幕の引附けと共に向ふへ
 這入る此模様宜敷く早ひ合方にて拍子幕

二幕目

役人替名

一楠	正行	一木	澤平次
一恩	地左近	一松	原五郎
一楠	三郎正澄	一白	井小藤太
一湯	淺六郎	一八	尾別當顯幸
一名	張八郎	一楠	正成

一和 田 正 遠
 一北 辻 玄 蕃
 軍 兵 大 勢
 竹 本 連 中

櫻井驛訣別の場 (其一)

本舞臺平舞臺向ふ淀川八幡山を見たる遠見此前に菊水の紋附し幕を張り都て櫻井驛陣中の
 体爰に松原五郎湯淺六郎木澤平次白井小藤太北辻玄蕃名張八郎の六人何れも陣立の拵らへ
 にて床机にかゝり居る此見得山嵐にて幕明く

松原「日頃主君の仰にて我討死も遠から
 じとの御物語」 湯淺「事によらば此度の御發向は最期の合戦やも計り難し」 木澤「兎

にも角にも心遣ひを義ではムらぬか」 五人「左様でムる」ト向ふより軍兵一人出て來り」

○「はッ申上げ升る」 白井「遠しい何事じゃ」 ○「ハッお召に因て正行公御一族の

方々を召連れられ只今お越しでムり升る」トいひ捨て這入る」 北辻「正行公御越しとわれ

ばイザ何れもお出迎ひの仕らん」 淨るう「待間程なく楠正行親に劣らぬ小櫻威し下に小具

足大紋の袖たぶやかに出立て花の姿も見榮への若武者一簇引連れ出來り」 湯「コハ若君

始め御老臣の方々にも遠路の御出馬」 六人「御苦勞千方に存ぞ升る」 和田「昨夜若よ

り火急の召狀取致へす若君のお供を馳參せし我々共」 恩地「夫と申も新田殿無謀の合

戦致されて兵庫表へ退き給ひ」 八尾「彼地に於て尊氏の攻登るを待受け耻辱を雪がん思

召の由」 正澄「尊慮の程も伺ひ度く只今參着致してムる」 和「イザ案内の致されよ」

松原「アイヤ何れも我君へのお目通りは若君御一人外々の者に之暫時遠慮させよとある

」 六人「我君の御上意」 正澄「然らば我々此所にて暫時休息」 四人「致すでムらう」

湯「左様ムらば若君様」 正行「方々案内」 六人「仕るでムり升せう」 淨「臣等が

案内に多門丸帷幕の内へ入り給ふ」 八「いかに方々急使を以て正行殿を召寄せられし様

子といひ此程より正成殿の詞の端々いかにしても心元なし品に寄らば此度の合戦討死のお

覺悟でとあるまいか」 烈「敵に臨むべいつととも霜に旭の照すが如く是迄まくせし天下

をば逆賊足利尊氏に奪これんも殘念至極」 恩「兎にも角にも天下の大事」 四人「ハテ

歎かはしき世の有様しやなア」 淨「しをれてこそは」ト此模様宜敷く愁ひ三重にて道具

ふん廻す

櫻井驛訣別の場 (其二)

本舞臺平舞臺真中に松の大木此後ろ矢張り菊水の幕張り都て以前の裏を見たる体上手に正
 成下手に正行住居時の太鼓にて道具納る」 正行「コハ父上に之麗はしき御尊顔を拜し恐

悦至極に存じ升る」 正成「ホ、ウ珍らしや正行早速の到着満足く近うく」 正行「

ハア、父上には朝敵討伐の爲め兵庫表へ御發向に附櫻井の驛迄出迎へとある急使を蒙り恩

地を始め一族郎黨八百餘騎を召連れて只今參上仕つてムリ升る」 正「流石と正行若年ながら我教へを守る健氣の舉動今日其方を呼び寄せし外ならず正成最期の合戦なれば責せて今生の對面なし跡々の義を申遣し置ん爲め」 正行「何と仰しやる」 正「其驚きと理りなれど今父が申事能つく聞け○抑も此君に頼まれ奉りしより終日終夜敵を滅さんと肺肝を碎き君重祚を踏み給へど僅か三年の太平をもなさず天下麻の如く乱れ毎年小勢を以て尊氏の大軍に駆け向ひ謀を以て敵を筑紫へ逐下すと雖も新田殿の怠りより合戦に討負け兵庫の津迄逃登りし故某万全の謀を廻らし再三奏聞致せ共」 淨「例の清忠是を遮り」

正「此度の合戦も敵を滅し太平をなせよとにもわらず矢張り大敵に駆け合はせ無益の合戦仕れとの御説ぞや日頃百万騎の朝敵が一時に起つて攻むるとも某だに在るなれば傾けられじと思ひしに千辛万苦の甲斐もなく斯く成行く事無念には思へ共なまじ此世に長らへて忠にもならず無益の辛苦致さんより此度兵庫の合戦に一番に駆け慥まし二心なさを顯はす心底推量せよや多門丸」 淨「流石英氣の正成も世の憂き事を悔み泣き聞く正行も涙を浮め」 正行「ハッ父上の御心中承り討死と御覺悟遊ばされしは御尤に候へども今父上おはさずば味方一日も堪る事あたえず逆賊の爲めに此天下を奪はれんも残念なれば何卒最期をお止り下さる様偏に願ひ奉る」 正「其方が詞尤なれど逆も存命思ひもよらず我なき後と

日頃の教訓心に躰し八尾の別當和田恩地正澄を以て父と思ひ日夜學問怠る事なく必らず忠義を忘るゝな父が臨終の教訓なるぞ」トいひつゝ取出す自筆の「一卷」 正「是こそは某自筆に書置きし國を治る數箇條の法令今こそ汝に譲り得させん」 正行「ハッこそ有難き御賜物夫に附ても一つのお願ひ此度の合戦御最期と承る上は何卒戰場の御供仕度此義お許し下さる様偏に願ひ奉る」 正「其方の願はる事なれども今教訓を遺せしは此正成に成替り朝家へ忠を尽させん爲め死るも生るも天下の爲め君への忠義を忘れしが」 正行「スリヤ如何様に申す共」 正「ヤアいひ甲斐なき不覺の涙我詞を用ゐずば親子の縁も是迄なるぞ」 淨「怒りの御目も打うるむ正行是非なく泪を拂ひ」 正行「此上と是非に及ばず仰せに隨ひ奉らん」 正「ホ、ウ適れゝ必共に忘るゝな」ト本釣鐘を打込み」 正「アリヤ最早申の下刻上意を蒙る此度の出陣延引なさば上みへの恐れ」 正行「スリヤ父上には最早最期の御出陣となお名残り惜しう存じ升る」 正「名残り惜きは子計りの子にも倍りし親の心中親子の愛に牽かれて延引なしなば君への不忠早く國へ歸られよ」 正行「スリヤ何うあつても此儘に」 正「生るも死るも忠義の道」 正行「そこを何卒」 正「エ、未練者めが」 正行「ハア、」 淨「涙の袖をぞ」 正「馬牽け」ト上手にて」 大勢「ア、」ト此見得宜敷くトンチヤンを打込み三重にて道具ふん廻す

櫻井驛訣別の場 (其二)

本舞臺元の道具へ戻る以前の和田恩地八尾別當楠三郎四人並び居る此模様宜敷く道長解る
 「ト後ろにて」 呼「御出陣」 和田「何最早御出陣ぞか」 八尾「責めて今際の思出に」
 恩地「正成殿が最期の門出を」 正澄「紀念と見做し」 四人「奉らん」 淨るう「待間
 程なく楠正成帷幕をさつと押開かせ駒も勇まぬ主従が別れの手綱わゆみな涙隠して立出
 給へば」ト正成馬に騎り軍兵大勢附添ひ出て来る」 和「始終の様子と是にて逐一承る君に
 と此度の合戦討死の御覺悟なる由」 八尾「臣等が身に取残念至極よ」 四人「存ぞ升
 る」 正成「我討死は兼ての覺悟和田恩地を始め別して八尾の僧正にも頼み置くは多門が
 行末」 八「其儀は假令仰せなくとも」 正澄「君の紀念の正行君」 恩「我々命のあら
 ん限り」 和「粉骨齏身」 四人「仕らん」 正「其一言が今際の悦び」 正行「責めて
 名残に今一度び」 正澄「御存生の」 智々「御尊顔を」 正「チ、」 智々「是が此世
 の」 正「さらび」 淨「忠義の種や櫻井の親子の別れぞ哀れなる」ト此模様宜敷く段切
 にて幕

二幕 目切

役 人 替 名

一藤 屋 房 吉 學校 教師 二 人
 一御 前 吉 同 生徒 大 勢

櫻井村楠公古跡の場

本舞臺向ふ櫻井の前幕の遠見真中元の松の大木此廻り石の玉垣中に楠公の碑傍に楠公子別
 の松と記せし高札を建上手出茶屋爰に御前吉散髪道楽者の拵らへにて大庭景陽編集の軍歌
 抄を枕にして寝て居る此模様大どろくにて道具納る「トどろく」を打上げ宿場の騒唄に
 なり茶店の内より亭主房吉出て來り」 房吉「村岡さんではあらう騒ぎおるが大分廻つて
 居る様ぢやイヤ廻つて居るといへば此お客さんは大分酔て二時間からも寝て居やしやるが
 蒸車に乗るお方ぢやないか」モシお客さんく「ト揺り起す」 御前吉「チ、ためへは飯屋の
 おどつさんか」 房「ハイおあなたは大層お酔ひでムリ升た」 吉「さのふの靈神戸を飛出
 して夜通しにやつて來たせいかすつかり寢込で仕舞つたがモウ何時だね」 房「モウ四時
 でムリ升」ト御前吉は掛行燈の名前を見て」 吉「こいつは妙だチイとつさんおめへの名
 前は藤屋房吉といふのかへ」 房「ハイ左様でムリ升所の狭いお蔭には村で藤房と申升た
 ら誰知らぬ者もムリ升せぬ」 吉「サア其藤房といへば昔しの忠臣其名に同じ藤屋の房吉
 鳥も通はぬ唐士へ通へば通ふ親子の縁とは儲か國性爺の淨るりで聞たが斯うして見ると目

に見ぬ事と夢にも見ねへものだなア」房「さうしてあんた何んな夢を御覽なすつた」
 吉「人に話すも馬鹿くしいがどつさん聞ねへこんな夢だ○夢は所も建武の昔楠が河内か
 ら悴の正行を呼迎へ死後の教訓したといふ其舊跡此の櫻井今其夢を思ふに附けても此本だ
 ○ソレ見ねへ此内に楠正成遺訓といふ歌があるだらう」房「ハイ○建武の昔正成は肌
 の守りを取出し」ト軍歌を諷ふ」吉「どつさんおめへは其軍歌を暗記して居るのか」房「
 イエ夫が門前の小僧習との經を讀んで然もけふの日曜は此村の小學校の運動會がムリ升
 ので悴がどつさん其本を忘れて往たのでムリ升が悴が諷ふを聞覺へにそこ爰を知つてゐるの
 でムリ升」吉「夫ではおめへの所の息子の本か」房「左様でムリ升」吉「何か知ら
 ぬが此本の爰にあつたを幸に枕にして寝た夢も藤房卿が壘谷の許から奉つた龍馬に就ての
 諫争も雲井を覆ふ奸臣の公卿原に妨げられ終に其身は崩世と思ひ定めし岩倉の忠臣義者の
 別れより此櫻井で正成が子の正行に遺訓をば傳へし迄を有々と手に取る様に見た夢もどつ
 さんおめへに聞て見ればあれと古跡の子別松藤房卿と思つたは煮賣店の藤屋房吉はおめ
 への所の名から夢に見たものであらうよ」房「夫は結構な夢を御覽になり升た明治の御
 代の有難さは此様な邊僻の所迄學校が建升て其お蔭で悴めはまた年々行かねと國史略とや
 らいふものを聞覺へて談しを聞けば楠様親子程大忠臣をお方とムリ升せぬわへ」吉「サ

ア其忠臣に引替へていはゝおれは尊氏同然」房「エ、」吉「サいとつさん水を一盃く
 んねへ」房「ハイ畏り升た」ト内へ這入る」吉「今更いふも愚癡なれと夢に見たる楠
 公も侍なれば此吉三郎も元は武士同し侍に生れながら末世末代名を残り官幣大社に祭られ
 て彌美名の輝くも錦旗の下に誠忠を尽した武士の手本に引替へおれは官に敵對なし復古の
 後世の中が兎角癩に障つた故戦争で死ぬ命を助かつたのは儲けものと道ぢらぬ悪事を働
 き噂アヤ餓鬼をさらけ捨ドロンと東京を出かけて算へて見れば早七年さのふ圖らず楠公の
 社内で見かけた此品と金剛石入りの金の指環何でも金目と引渡へなける積りで出て來たが
 今の夢をば思ふに附け正行程には行かず共おれも男の子もわれば教への一つもせにやアな
 らねへ親の骸でありながら賊を働さ何と子に此しやつ面が合はれやう今日の覺た吉三郎ア
 、誤つた事をしたなア」ト房吉コップに水を盛り出て來り」房「大きに遅くなり升た」
 吉「サ、とつさん懼りだつた」ト上手より學校生徒大勢軍歌を諷ひおから教師三人附添
 出て來り」生徒「建武の昔正成は肌を守りを取り出し是は一歳都攻のわりし時下し賜ひし
 楠言なり」房「教師様御苦勞様でムリ升○コレ房太郎軍歌の本が爰にあるぞよ」ト生徒
 〇領き軍歌を諷ひながら皆々向ふへ這入る」吉「今諷ふて行くあの軍歌と夢に見た通り
 たがどつさんおめへの息子もわの中に交つて居るのか」房「ハイ三人目に行升たのが私

の悴でムリ升」 吉「さうかわれがぬめへの息子がさうして幾つにある」 房「八年二箇月でムリ升」 吉「夫ぢやアねれが東京に残した悴と同じ年だがねれが悴もわの様に學校へでも往つて居るかしらん」 房「夫ではわんたえ東京のお方でわちらにわ子があるのでムリ升か」 吉「サアおれも薬の上から別れて今年ぬめへの息子の年と同じ年になるけれど是迄何の便りも聞かねば生て居るやら死たやら」 房「そりや又何ういふ譯でムリ升」 吉「イヤ何譯も絲瓜もない事よ〇夫はさうと勘定をしてくんねへ」 房「畏り升た」ト上手へ這入る」 吉「今見た夢で七年來夢にも思はぬわの悴に何だか頻りに逢ひ度くなつた〇殊に穿んだ此指環も返してやり度く思つても是を受取た使の者はやつぱり東京の者なれば何うでも是は行かにやアならぬへ〇ナイとつさんく」 房「ハイ」ト出て来る」 吉「ぬめへの所に薬鞋があるか」 房「ハイムリ升」 吉「あるなら一足持つて来てくんねへ」 房「畏り升た」ト内より薬鞋一足持て出て來り」 房「ハイ左様さら」 吉「よし〇そこで勘定は幾らになる」 房「十八錢六厘でムリ升」 吉「所でぬめへの所に何ぞ冠る物はなからうか」 房「蛸がムリ升が何うでムリ升」 吉「イヤ何喰ふ物じやアねへ何ぞ菅笠でもいいが」 房「へエ、天窓に冠る物でムリ升たか古うても宜敷くと私の笠がムリ升が夫なとお上げ申升せうか」 吉「そいつア有難い〇ぢやア夫を讓つて貰わう

房「然しね客さん鶴鞋を履替へてどちらへお越しになり升る」 吉「至急に東京へ行かねばならぬ用が出來たから」 房「そんなら今から東京へ」 吉「早くしてくんねへ」 房「畏り升た」ト内より古菅笠を持出て來り」 吉「是では何うでムリ升」 吉「何でも構はねへ〇ナイとつさんは勘定濟ましてくんねへ」ト五十錢銀貨を渡す」 房「是ではお釣りが」 吉「イヤ夫には及ばぬへ」ト花道へ行くを」 房「ア、モシお貰入が」ト床机の上にあるかます貰入を見せる」 吉「投つてくんねへ」 房「御免を」 吉「ナットシヨ」ト投る貰入を笠にて受るが木の頭」 吉「かつちけぬへ」ト貰入を懐ろへ入れ笠を冠りながら向ふへ走り這入る」此模様宜敷宿場の騒唄にて拍子幕

三幕目

役人替名

- | | |
|---------|-----------|
| 一箕浦吉三郎 | 一學生中西東作 |
| 一同悴吉之助 | 一玉田の下女お龜 |
| 一學生南喜太郎 | 一豊田六左衛門 |
| 一玉田娘お類 | 一吉三郎女房お茂世 |
| 一箱了衆吉 | 一鍋焼屋貞介 |

一士官學生小松操
一藝者 千代

仕出 四人

淺草公園地内の場

本舞臺都て淺草公園地の飾附爰に仕出四人床机に腰を掛居る此模様唄双盤にて幕明く「ト仕出捨臺詞をいひながら下手へ這入る向ふより中西東作小松操南喜太郎士官學校生徒の拵らへにて出て來り」中西「小松君苟くも士官學校の生徒たる者が一婦人の爲めに精神を悩ますといふがあるものか」小松「何そんな事の心配ではないといふに」南「然し向ふの床机へ往つて一服やるべし」ト舞臺へ來るを戸家の内にて」六左衛門「ナイ」小松「ト呼びながら豊田六左衛門走り出て來り」六「操待てといふに待たぬか」苦しい」小「ナ、わなたと伯父さんですか」南「夫では小松君此老人は君の伯父御か中「是乙始めて御面會を致し升以來御交際を願ひ升」六「是は御挨拶痛み入升手前事は小梅に住居致しおれば御寸暇にはお遊びに」中「何れ參堂致し升る然し伯父御には小松君に何か御用のある様子」南「僕等と十二階へでも上つて居るから話しが濟たら君來給へ」小「僕も同行致したいが」六「イヤ操長うとといふの一寸話しがあるから」イヤわなた方は何うかお先へ」南「夫では失敬」ト兩人上手へ這入る向ふより藝者お千

代箱丁桑吉附添出て來り小松を見て跡へ下る六左衛門は是を知らず」小「シテ伯父さん僕に用とは」六「外でもないが今度神戸から迎へて來たわのね類といふ娘と夫婦になつて貰いたい」小「何かと思へば其事ですか夫は過日も申升通り今生徒隊少尉には登進致し升たが是からは大事を今妻と娶り升ては自然と學業も怠る道理」六「夫はさうでもあらうが今度態々神戸迄行き婚姻の事を取極めて來たわの娘の親といふと手前も舊友で昔は勘定奉行も勤めた幕府の旗本今で神戸で銀行の頭取も致しおれば愧かしからぬ素性の者夫を彼是不服をいふと何かお前不足のじや」小「イヤ決して不足とないのですが軍人といふ者は若しも國家に不幸を生じ開戦でもある時は妻を持ち子を持たば十分の備さが出來升せんから先づ此度の縁邊の義と」六「左程に謝絶するならば是迄出してやつた學費も精算したなら四百圓にも登るであらう其半額を今戻せ」小「さう俄かに請求されては僕が迷惑致し升」六「其迷惑も心から賤しい藝者と夫婦になるが本望であらう」小「何を仰じやる」六「お知るまいと思はうが皆聞てゐるわい」小「イヤ其方は今度神戸へ供に連れたる貞介が彼地より妾を隠して行衛の知れぬは先方より贈られた指環を穿させ夫で此婚姻を無茶苦茶にする心であらうがモウ六左衛門堪忍袋の緒が切れた指環の詮議はこつちですから金を戻せ」小「宜敷うムリ升左程意地から仰じやる事なら辨償を致し升せう」

「六」五スリヤそちに金があるか」 小「只今はムリ升せぬが是から金策を致して見升せう
 「七」ア、こりや〜待てくれ〜さういふで困らしたなら結婚するであらうと思ふて
 いふたのだ」 小「イヤ左様の事は承とらずとも宜敷うムリ升」ト上手へ這入る」 六「コ
 レ操々」ト呼びながら跡を追ふて這入るた千代衆吉出で來り」 衆吉「モシお千代さん何
 うも心配な譯ですね」 千代「初めて聞た今の様子夫でと兄さんが神戸から歸つて來て
 馬道へ宅替へしたは世間を憚る内證故か夫でと預かつた指環をば兄が窺んだに違ひない其
 疑ひが操さんや私に掛つて彌濟まぬなせそんな愚い事をしてくれたんだらうねへ」ト兩人
 上手へ這入る向ふより御前吉旅形にて人力車の蠟燭賣の小役吉之助の胸ぐらを捕らへお
 類お龜服紗を持ち出て來り」 御前吉「サア餓鬼め來やアがれ」 吉之助「モウ悪い事と仕
 ないから堪忍しておくれヨウ伯父さん」 お類「モシあなた御深切に有難う存じ升が其様
 に詫びており升ればモウ堪忍してやつて下さり升せ」 お龜「イエ〜夫はお慈悲過ると
 いふもの此包みを取られて御らう宏升せ此龜が首を釣らねばおり升せぬ何でも派出所へ連
 れて行かねば」 吉「マアわつちに任かしてお置きなさいサア來やアがれ」ト舞臺へ來り」
 吉「モシ此餓鬼の事と兎も角も安心ならねへは其包金に違ひはムリ升せんか」 龜「ト
 び〜檢めて見升せう〇健か二百圓ムリ升わいなア」 吉「エ、二百圓〇シテあなたのお
 所は」 龜「ハイ小梅村引舟通りで豊田といふ方に居る者でムリ升る」 吉「何にしても
 此小僧と大きな事をする奴だ」トお千代衆吉出で來り」 衆「モシお千代さんわんまり此
 人込みで操さんの姿も見入升せんからマア一遍東飄亭へお出なさい」 千代「馬鹿な事を
 おいひでない私しや兄さんに逢えねばならぬ用もあり又操さんも何うしたのだらうねへ」
 ト下手へ這入る」 龜「コレお龜今の話しは健かに操さん」 龜「サイなア今のを聞ては
 悔しいでとあり升せんかサア一所にお出なされ升せ」ト下手へ這入る」 吉「何の事だ今
 の女は二百圓といふ金を取返してやつたのに禮もいそねへで往つて仕舞つた〇ヤイ小僧爰
 へ來い」 吉之「ハイ」 吉「一休手ゆへは何處の者で其擔いで居る箱は何だ」 吉之「
 ハイ内は此馬道で日暮より車屋さんに蠟燭を賣つて歩く者で是と蠟燭の箱でムリ升」
 吉「アム其小商ひをする者が何で今の様な事をしやアがつたれれも大きな聲ではいへねへ
 が身に覺へのある骸故逃してやり度と思つたれと今の供の女が是非派出所へ連れて行くと
 いつたから夫が助けてやり度さにおれが態と此烟管で手ゆへの額を擲つたは今の女の腹を
 いせ手ゆへをおれが貸ふ爲め小僧額の疵と痛からう」 吉之「ハイ痛うムリ升」 吉「其
 痛いと思ふ性根があるなら是に懲りて此後と決して悪い事をするなよ定めて親もあるだら
 うにちやんやおつかアは何をして居るのだ」 吉之「おとつさんは私の生れた時に死に升

所は」 龜「ハイ小梅村引舟通りで豊田といふ方に居る者でムリ升る」 吉「何にしても
 此小僧と大きな事をする奴だ」トお千代衆吉出で來り」 衆「モシお千代さんわんまり此
 人込みで操さんの姿も見入升せんからマア一遍東飄亭へお出なさい」 千代「馬鹿な事を
 おいひでない私しや兄さんに逢えねばならぬ用もあり又操さんも何うしたのだらうねへ」
 ト下手へ這入る」 龜「コレお龜今の話しは健かに操さん」 龜「サイなア今のを聞ては
 悔しいでとあり升せんかサア一所にお出なされ升せ」ト下手へ這入る」 吉「何の事だ今
 の女は二百圓といふ金を取返してやつたのに禮もいそねへで往つて仕舞つた〇ヤイ小僧爰
 へ來い」 吉之「ハイ」 吉「一休手ゆへは何處の者で其擔いで居る箱は何だ」 吉之「
 ハイ内は此馬道で日暮より車屋さんに蠟燭を賣つて歩く者で是と蠟燭の箱でムリ升」
 吉「アム其小商ひをする者が何で今の様な事をしやアがつたれれも大きな聲ではいへねへ
 が身に覺へのある骸故逃してやり度と思つたれと今の供の女が是非派出所へ連れて行くと
 いつたから夫が助けてやり度さにおれが態と此烟管で手ゆへの額を擲つたは今の女の腹を
 いせ手ゆへをおれが貸ふ爲め小僧額の疵と痛からう」 吉之「ハイ痛うムリ升」 吉「其
 痛いと思ふ性根があるなら是に懲りて此後と決して悪い事をするなよ定めて親もあるだら
 うにちやんやおつかアは何をして居るのだ」 吉之「おとつさんは私の生れた時に死に升

て親おつかさん一人で去年から摺梅が悪くつて死ぬ所をお醫者の薬で助かつたれど方々におあしりの借が出来て毎日の催促故今の様に悪い事をしたんだだけだたんだのお金と思つてしたのではあり升せん二十銭か三十銭欲しいと思つて取つたのもけふ始めてムリ升是から決して致し升せんから伯父さん堪忍して下さり升せ」
 言「夫し可愛想な事だヨウ小僧おれもたんの金があつたら何うかしてやりてへのだがなけなしの懐ろで思ふ様には行ねへが此三十銭を手めへにやるから膏藥でも買つて貼つて貰へよ」
 言「有難う是でわしたのお米も買へ升し利足も拂へ升からモウ今夜は商ひせずには歸り升」
 言「日もとつふり暮たから氣を附けて行けよ」
 言「伯父さん有難う」
 言「何處の知らねへが親仁と死んでないとやらおれと活ておりながら子に構はねへ親だと思へば尙餓鬼の事を思ひ出す然し七年振りて歸つので勝手分らねへには一番恐入るチア」
 言「上手の内にて」
 真介「鍋焼湯餛」
 言「いひながら荷を擔ぎ出て來る御前吉と頼政りとして」
 言「チア」
 真「盃くん」
 真「畏れ升てムリ升」
 言「ト真介拵らへおかゝる上手よりお千代出て來り」
 千代「チア、お前は兄さんでしないか」
 真「お千代か今頃何處へ往つたのだお座敷戻りか」
 千代「イヤお前の所へ尋ねて往つたら留守故お隣りで聞た所此公園へ往つたぞの事夫で迎ひに來たのだからサア内迄一所に歸つておくれお客さんは何うでもいから捨てお置な」
 言「チア」
 姉さん失禮な事をいひなさんな」
 真「イヤ御免なつておくん

なさい〇イヤお待遠でムリ升たらう」
 言「ト鍋焼を床机の上へ置く」
 千「モシお客さんこちらに急ぎの用があるんですから何うぞお早く上つておくんさいよ」
 言「幾ら早くといつたつて此熱いのが何うして急に喰へるものか」
 千「夫でここつちに困り升よ」
 言「マアせかねへで待つてくんねへ」
 言「ト喰終り」
 言「ソレ錢を拂ふよ」
 真「有難うムリ升」
 千「サア」
 早く來ておくれよ兄さん」
 真「今行くわい」
 言「ト兩人向ふへ這入る」
 言「顔は小意氣な女だが何うも正氣ではねへ様だ」
 言「トお茂世出て來り袖を牽き」
 茂世「モシ」
 言「エ、胸りした柳の蔭から幽霊か」
 茂「アレ御笑談ばつりお遊びなさいか」
 言「偕と地獄だな」
 茂「大目に見て下さいな」
 言「イヤおれと引張られる様な者ちやアねへら何れ今夜は何處かへ泊り込む腰だが一体たまへは何處へ連れて行く積りだ」
 茂「誠にモウきたない内ですけれを來ておくんないな」
 言「そりや犬の小家でも構えねへさうして内へ何處だ」
 茂「ハイ馬道でムリ升」
 言「所でおめへ酒を呑むのか」
 茂「お相手なら一つや二つは」
 言「そいつは話せる〇ぢやア氣の毒だが歸りに五んつく提げて往つてくれな」
 茂「ハイ宜敷うムリ升」
 言「手を借してくんな〇チイ是は十銭だぞ所で跡より」
 言「ト此内隠しより箱入の指環を撮み出してバッタリ落すをお茂世取揚げ見て是は何

うやら時計の様な」 吉「エ〇何」ト引手操のが木の頭」 吉「時計を持つ様なおれぢやアねへやな」ト腹掛へ入れる此見得宜敷合方にて拍子幕

四幕目

役人替名

一 箕 浦 吉 三 郎	一 吉 三 郎 女 房 お 茂 世
一 同 悴 吉 之 助	一 近 藤 貞 介
一 貞 介 妹 お 千 代	竹 本 連 中

浅草馬道裏家の場 〔其一〕

本舞臺常足の二重板羽目の蹴込み鼠欄間見附押入破れの鼠壁前側に破れ障子下の方落間正面に柵を釣り勝手道具を置此下籠に釜を掛け是にお千代の蝙蝠傘を建かけいつもの所戸のもぎし門口下手三尺隣家の入口引戸に錠をねろしわり都て馬道裏長家の体下手に貞介荷をおろし錠を明けて居るお千代立かゝり居る此模様新内の合方にて幕明く」 お千代「先程はお邪魔を致し升た〇チヤ誰何もお留守かいなア夫にしては門口を明け放し無用心なさつき蝙蝠傘を預けて置たのぢやが入口に締りがしてないど一窺まれる事もあるまい兄さん早く内へ這入つておくれ」ト拾臺詞にて貞介は荷を内へ入れる」 千「サアママ爰へ来ておくれ」ト兩人下手の入口の内へ這入る向ふよりお茂世一升徳利を持ち御前吉と連立ち出て来り」 茂世「誠に闇い裏ですから真中をお歩きなさい升せ」 御前吉「さうしておめへの内へ何處だ」 茂「ツイ向ふでムリ升」 吉「夫ぢやアお宿へ着くとしやう」ト舞臺へ来り」 茂「チヤ明りが消へて居升から只今附け升」 吉「然し家が分つたから支度の出来る迄に湯へ往つて来やう」 茂「本に夫が宜敷うムリ升此邊は不用心ですから何も彼も置いてお出なさいよ」 吉「違へねへ」ト股引腹掛を脱ぎ指環をお千代の蝙蝠傘の中へ隠し」 吉「夫ぢやア往つて来るせ」 茂「お早くお歸りなさいよ」 吉「丸で噂アの様だ」 茂「さうであつたら嬉しい事でムリ升せう」 吉「味くいふせ」ト花道へ行く向ふより吉之助鐵葉の手灯を持ち炭取箱を提げ出て来り行當る」 吉「是は御免なせへ」 吉「お向ふの伯父さんか」 吉「ハ、ア子供だな」 吉「違つて居る」ト行違ひ御前吉と向ふへ這入り吉之助は舞臺へ来る此内お茂世はマッチを捜し門口の明く音を聞き」 茂「誰だへ」 吉「チ、おつかさん歸つたのか」 茂「チ、吉かへ何處へ往つて居たのだへ」 吉「油がないから石炭と炭を買つて来たよ」 茂「道理で手灯が知れないと思ふて居た」トマッチチチ捜し明りを點し」 茂「今夜は又大層儲けがあつたと見へるねへ」 吉「イエさうぢやないよおつかさんけふ公園で何處の伯父さんか知らねへが三十錢下さつたので油も炭

れ」ト兩人下手の入口の内へ這入る向ふよりお茂世一升徳利を持ち御前吉と連立ち出て来り」 茂世「誠に闇い裏ですから真中をお歩きなさい升せ」 御前吉「さうしておめへの内へ何處だ」 茂「ツイ向ふでムリ升」 吉「夫ぢやアお宿へ着くとしやう」ト舞臺へ来り」 茂「チヤ明りが消へて居升から只今附け升」 吉「然し家が分つたから支度の出来る迄に湯へ往つて来やう」 茂「本に夫が宜敷うムリ升此邊は不用心ですから何も彼も置いてお出なさいよ」 吉「違へねへ」ト股引腹掛を脱ぎ指環をお千代の蝙蝠傘の中へ隠し」 吉「夫ぢやア往つて来るせ」 茂「お早くお歸りなさいよ」 吉「丸で噂アの様だ」 茂「さうであつたら嬉しい事でムリ升せう」 吉「味くいふせ」ト花道へ行く向ふより吉之助鐵葉の手灯を持ち炭取箱を提げ出て来り行當る」 吉「是は御免なせへ」 吉「お向ふの伯父さんか」 吉「ハ、ア子供だな」 吉「違つて居る」ト行違ひ御前吉と向ふへ這入り吉之助は舞臺へ来る此内お茂世はマッチを捜し門口の明く音を聞き」 茂「誰だへ」 吉「チ、おつかさん歸つたのか」 茂「チ、吉かへ何處へ往つて居たのだへ」 吉「油がないから石炭と炭を買つて来たよ」 茂「道理で手灯が知れないと思ふて居た」トマッチチチ捜し明りを點し」 茂「今夜は又大層儲けがあつたと見へるねへ」 吉「イエさうぢやないよおつかさんけふ公園で何處の伯父さんか知らねへが三十錢下さつたので油も炭

も買つて今大家さんへも十銭やつて北新道の日吉し賃の所へも十銭やつて来たのだよ」

茂「夫はマアいゝ事であつたなア○チヤ吉お前其顔の疵は何うおしたへ」 吉「エ○ア

、是かへ是之餘所の子と云さけて轉んで打つたのだ」 茂「ソレ御覽常からいはない事か

モウおんざけでないよ」 吉「何痛くもない」 茂「夫ならよいがおふないよ○今夜も

又お客さんがお泊りだから幸ひ隣りの伯父さんが歸つてお出の様子故お前往つて泊めてお

賞ひ」 吉「夫では往つて来やう」ト隣りの入口へ来り」 吉「伯父さん泊りに来たよ」

ト内へ這入る」 茂「コレ吉よわんまりお世話をかけるでないよ○モウ這入て仕舞ふたか

いなア」 淨る「跡には獨り主じの女我子の孝に最と猶思ひ出せる夫の事今は何處に何う

してと案じる胸も女氣の狭き住居の燻りし焚火の烟り目を刺して涙催す獨言」 茂「男の

親の顔知らず母親一人と思ふ我子の孝行を何時か夫に廻り逢ひ見せて自慢のしたさから貧

苦の中で學校へ上げと置しも去年から今年へ掛けし長々の母が病氣に學費も續かず退校さ

した其日から可愛や年端も行かぬ子に小商ひをさすのみか煩ひ中の借錢に止む事を得ず道

ならぬ母が夜毎の稼ぎをば口にいこねと心に悟りお客といへば御近所へ泊りに往つて寐る

我子此身は肌身を汚さずとも今の果敢なき身の世渡り邪見お夫が恨めしい○トサいふも女

のみんて愚痴○今のれ客の戻らぬ内ドレお爛の湯なと沸し升せう」 淨「客の歸るを松さ

炭常盤の操を」ト此模様宜敷く三重にて道具よん廻す

淺草馬道裏家の場 (其五)

本舞臺平舞臺見附上の方押入破れのある風壁此前に二枚折の屏風を建上手破れの障子家体

爰に以前の荷を置あり下手同じく障子家体都て以前の隣家の模様爰に古行燈を灯し貞介腕

組をなし傍にお千代膝を突掛け涙を拭ひ居る此模様淨るりにて道具納る」 淨る「只なら

ぬ秋を隣りの壁一重隔てぬ中の兄妹も角目立つたる争ひの愛身は同じ涙聲」 お千代「夫で

は兄さんお前濟まぬぢやないかいなア」 貞介「コレお千代靜にしてくれ今隣りの子が泊

りに来て爰に寐て居るではないか若し其事の漏れた時には操さんの御深切も水の泡シテ又

夫は誰から聞て何うして知つた」 千「サア夫を知つたも斯うでムんす○けふお客に呼ばれ

て公園へ往つた所豊田の旦那が操さんに向つておつしやるお詞を木蔭に忍んで立聞けバ今

度神戸よりお迎ひなされた操さんのお嫁さんから贈つた指環を横取してお前が影を隠した

は兄妹慣合ひ相談づくで仕た事の様に操さんのお身に迫りし旦那の疑ひ夫故是迄送つたる

學資の内二百圓今戻せとのけふの難題又私の爲めには其指環が操さんのお手に入り此結

婚を實行されては心の願ひが叶はぬお前が長く御恩を受けた御主人の豊田様に御迷惑を

掛けては濟まぬと思ふに附けても心に當る兄さんお前が今度の宿替へ此間神戸から今戻り

たと私の内へ来ての話しに内証ぢやといふたをけふ料らず的中したるお主のね詞お前が内へ持つて戻つた指環を私が貰ひ受け操さんと言交した身の言譯と諸共にお前の詫びもする心悪い心を改めて指環を私に渡しておくれ」

淨「身の悲しさも願はず義理を思ひし妹の心聞居る兄も感じ入り」

真「サ、妹能くいつてくれたれも操さんと譯のある事知つて居る故指環の事をけふ迄だまつていはなんだが此兄とても御恩の御主人何でおれが窺まうか身の災難を聞てくれ其指環をば預つて旅宿へ歸る楠公社内で巾着切にしてやられ跡を追ふてと見たれども何分群衆の中なればとう／＼賊を取逃し言譯けなさに東京へ歸つて操様に始終を話と死なうとしたを操様の仰しやるには一旦お千代と約束した詞は反古に出来ぬ故万事おれに任かして置いて斯う／＼せよどのお詞故お差圖通りに宿替へして其賊に逢ひたいと思へど神戸と東京故捕らへる事のならぬ本意なさコレお千代推量してくれ」

千「そんなら其指環といふは神戸で窺まれたのでムんすか」

真「夫故けふは言譯に身を投げやうかあすとお詫に首を縊らうかと思へども操様に了簡あると仰しやるお詞があつた故済まぬと知りつゝ斯うして居るわい」

千「其操さんのお情と私の身に取れ何れ程か嬉しうとムんすけれどよしない事でもあつた時はあなたのお身の爲めにもならず」

淨「如何はせん」と襟元に首差入れて取つ置つ思案に胸も塞がりし一間の障子押開き」

ト上手家体の障子を

明け吉之助顔を出し」

吉之助「伯父さんお氣の毒だね」

淨「いふに悔い」

真「サ、吉ぢやん起きて居たのか」

吉之「ナニ寢やうと思つても二人が泣いて話をするものだから寢られない」

真「そんなら今の様子をば」

吉之「みんな聞て居たよ」

真「コレ吉ぢやん今聞た事誰にもいふてはいけなさいせ」

吉之「いやアしないよ伯父さんお休み」

淨「跡には兄妹願見合はせ」

千「モシ兄さん假令わの子がいとすとも所詮是と何時迄も知れずにと居升せぬよ」

真「サア夫は素より承知なり又今そちの精神を聞て見れば早く此お詫びをせねばなるまい」

千「さうして其お詫びの仕様は」

真「死ぬより外に仕方あるまい」

千「エ、」

真「コレ靜かにしてくれ」

淨「跡は詞も」

ト此模様宜敷く三重合方にて道具ふん廻す

淺草馬道裏家の場 〔其三〕

本舞臺元の道具爰にお茂世酒の爛をして居る御前吉竹の皮包を傍に置き二重に腰を掛けて居る此模様右の合方にて道具納る」

御前「久し振りで竹門の湯へ飛込んで来た戻りに酒の肴がなからうと思つて天麩羅を買つて来た」

茂「夫と能くお氣が付き升たマアお上んささい升せ」

吉「夫ぢやア御免を蒙らう」

ト二重へ上る下手入口よりお千代出て来り」

お千代「モシお隣の兄さんちよいと」

ト吉之助出て来り」

吉之「姉さん何だへ」

千「今

お前に頼んだ通り伯父さんが何んな事を仕様も知れの故氣をつけて居ておくんさといふ
 吉「アイヨ」 千「屹度お頼み申升たよ」ト吉之助は矢張り下手の入口へ這入るお千
 代はこちらへ來り」 千「お隣りの姉さん先程これ邪魔を致し升たお蔭で兄に逢ひ升て有
 難うムリ升お預け申升た傘をお貰ひ申て歸り升」 茂「夫ではお前さんモウお歸りですか
 千「ハイ左様なら」ト蝙蝠傘を持ち向ふへ這入る」 吉「今のは女の機だが獨りしや
 べつて往つて仕舞つた」 茂「さうですよ」トいひながら明りの影より御前吉の顔を見て
 恠りなし」 茂「やあなたは」 吉「ナ、そちは」 茂「旦那様か」 吉「女房か」
 茂「お懐かしうムリ升た」 吉「能く達者で居てくれた〇明りを附ける火が消へた」
 茂「ア、モシ其明りと附けて下さり升な七年此方逢ひたいと思ふに思ふた夫の顔見るに見
 られぬ今宵の仕宜何うマア顔が合へされ升せう面目ない面目なうムリ升わいなア」 吉
 其面目ないも尤だが尙面目ないはおれが骸今更いつても始まらねへが身の言譯の一通り聞
 てくれ〇手めへとおれは手習朋輩まだ其頃は小祿ながらおれは旗本の三男なり手めへと御
 家人の組頭小松三木之進ともいこれた者のお嬢さんであつたれと手めへも十六おれも十六
 同老水の出端の若氣で味な中になると間もなく幕府瓦解の變動から兄弟三人脱走なし二人
 の兄は戦死を遂げ生殘つたはこれ一人夫から身をば持崩し仕度三味した揚句以前の縁で手

めへとば引送つて女房に持つたがしよがない人力車の噂アが旦那くくと三指の行儀正し
 所から終と神岡の者迄に御前くといはれた吉三郎夫も子供が出来てから急に世帯が否に
 あり子と女房を置去りに七年此方諸方をば飛歩いて居たなれと始めて今度感致が起り悪
 心を改め戻つて見れば思ひも寄らぬ今夜の會ひ〇夫も養ふ亭主に捨せられ困るから
 ぞもあらうけれと地獄として居候と思はなんだ然し夫も元はといへばおれがみんな悪い
 からいふ所は一つもねへが責めは手めへの事だから子だけ立派に育て上げ成人をさして
 くれたらう夫はつかりが樂しみに心を替へて戻つて來たのだ」 茂「そんならあなたは心
 を改め此東京へ戻つて來て下さい升たか」 吉「夫といふのも蓋の上から名さへ附けずに
 別れたる様の顔が見度いといふのも改心をしたおれか」心何うだ無事か達者で居るのか」
 茂「サア息災に成人して今年八つになり升いなア」 吉「さうして悴と何處に居る早
 くおれに逢はしてくれ」 茂「サアお耻かしい事ながら今宵の様な仕宜なれば隣りへ寝さ
 むに寄り升た」 吉「詞中端に破壁より子は遠しく手燭をさし出し」 吉「おどろかつかさん
 早く來ておくれ伯父さんが」 茂「そんならあなたは此子を」 吉「知らぬでかいけよ淺草の公
 園で人の命を盗んだ故懲しめの為め此烟管で額を割つた鐵燭臺」 茂「ア、」 吉「手め

へと母と呼ぶからとそんなら是が二人の中に」 茂「儲けし我子でんすわいなア」
 吉「エ、」 浄「驚く父を父とも様子知らねば聲振立」 吉「おつかさん其伯父さん
 にはお禮をいふて貰はねばならねどもお隣りの伯父さんが神戸とやらで指環を取られた言
 譯に首を絞つて死ぬといつてじや早う来ておくれ」 浄「言捨遣入る我子の詞聞て驚
 く吉三郎」 吉「何だ神戸で指環を取られたる其言譯に死ぬとはてつきり何時かの男に連
 へねへコリヤ斯うして居られねへわへ」 浄「立かゝるを引留め」 茂「マア待つて下さ
 んせ今此様な淺間じい世渡りするも譯わつて肌身汚さぬ其言譯を聞て往つて下さい升せ」
 吉「エ、夫所の事じやアねへわへ」 浄「遣らじとするを突退けはねのけ凶事なき内と
 逸散に隣りの家へ駆入つたりお茂世は備も夫の跡追はんとせしが立留り」 茂「イヤ、
 今更言譯すればとて夫と知らず面目ない客わじらいのざれ言も心の中は我家に伴ひ身の薄
 命を歎いては枕交はさず今宵も亦語つて聊かのおあしなりともお恵み受けんと思ひし客が
 操を立る夫とは罰か報いか情ない所詮此身は言譯に死ぬるより外にない責めて一筆書置を
 跡に遺してさうじやく」 浄「いひつゝ立つて戸棚より取出したる硯さへ塵が積つて山
 々の○涙と共に」下此様模宜敷く三重にて拍子幕

淺草馬道裏家の場 (其四)

本舞臺以前の道具爰に貞介首を縊らうとして居るを御前吉後ろより抱き留め吉之助立かゝ
 り居る此様模宜敷く淨るりにて道具納る」 浄「既に斯うよと見へたがを吉三郎としつか
 と抱留め」 御前「コレ短氣な事をしなさんなマア待なせへ」 吉之助「コレ伯父さ
 ん待よ」 貞介「イヤ何處のお人か存じ升せぬが死なねばならぬ身の言譯」 吉「サア其
 死なうといひなさるのと神戸の楠公社内にて指環を取られた言譯ぶらう」 貞「ヤ○合點
 の行ぬ何うして夫を」 吉「知らいでならうかわつちの面をお前さん覺へて居なさるだら
 う」 貞「誠にさうじや健かに其日の車屋さん何うして爰へ」 貞「實は竊んだ指環を
 ば態々返しに参り升た」 貞「エ、」 吉「サア斯う計りで合點も参り升まいが是には
 段々様子もおれど知らぬ事と心ひながら窃をしたとて無残にも天窓を割た悴の前で親が
 悪事の言譯も出来ぬ今夜の不思議の都合ひ暫く待つてくんない」 貞「何悴とこそりや
 何處に」 吉「爰に居るのが七年跡置去りにした實の我子」 吉「エ、そんなら私はお
 前の子でおとつさんは泥坊かへ」 吉「オ、晝は手めへに意見をしていふも面目ない仕宜
 だが改心したから安心しろ」 貞「夫では少しも早く其指環を」 吉「御苦勞ながら嫌ア
 の家迄」 貞「サア一所に行升せう」 吉「おとつさん私も一所に」 貞「イヤ手めへ
 は此伯父さんの歸る迄爰の内の留守をして居ろ」 吉「アイ、」 貞「大人しく留守

としてろよ」ト此模様宜敷く頃にて道具ふん廻す

浅草馬道裏家の場 (其五)

本舞臺元の道具右の隅にて道具納る (ト隣りの入口より御前吉貞介出て来り捨臺詞にて内へ這入り膳の上にある書置を見て) 御前吉何書置の事 貞介「エ書置とは」 吉「一寸待つておくんなさい」ト書置を讀む事おつて 吉「飛んだ事をしやアがつたな」ト遠く出候とするを貞介引留め 貞「コレ何うしたものだ」 吉「何うしたといつて嗅アが吾妻橋から身を投げて死ぬる覺悟で殘した書置」 貞「エ、」 吉「早く往つて助けてやらねばなりませぬ」 貞「夫とさうでもあらうけれどさつちも急ぐ指環の事其指環は何處にふり升」 吉「そこにある蝙蝠傘の中に隠してあり升から出して持つて往つてくんませへ」 貞「オ、」 吉「淨いひつゝ立寄り見て悔り」 貞「何も蝙蝠傘はないがな」 吉「ない事とねへ答だ」 貞「さつき儘かに隠したる指環を入れた蝙蝠傘姿の見へぬはコレや變だ」 貞「サ、此盗人の能く味々と欺ましやがつたなア何うも窺んだ品物を神戸から東京迄持て来そうな事があいに思つたなれを改心したとある故にそんならさうかと来て見れば形もない事のかしつたな」 貞「サア其疑ひは尤なれを決して欺すの偽るのと」 貞「そんなら其蝙蝠傘は何處にある」 吉「サア夫も嗅アの命さへ助けたなら傘の行衛も分り升せう」 貞「杯といふて逃やうで」 吉「何そんな事は決してねへ少し待つて下さい」 吉「跡を慕ふて」ト向ふへ走り這入る此模様宜敷く三重にて幕

五幕目

役人替名

- | | | | |
|-----|-----|-----|------|
| 一巡官 | 瀧川清 | 一豊田 | 六左衛門 |
| 一娘 | か類 | 一女房 | お茂世 |
| 一藝者 | お千代 | 一箕浦 | 吉三郎 |
| 一下女 | お龜 | 一手代 | 清助 |

浅草吾妻橋詰の場

本舞臺向ふ鉄柵の中に一面の柳の立樹此後ろ川越しに本所の町家を見たる遠見上手吾妻橋の出しかけ松の釣枝都て浅草吾妻橋詰の体髪にお茂世の下駄を脱きわり此模様時の鐘水の音にて幕明く(ト向ふよりお千代出て来り) お千代「此身に義理と立通し操さんが結婚を嫌ふて下さんす斗りでなく兄さんの命迄かばふて下さんす御深切と何んなに嬉しいか知れぬけれど夫では済まぬわ主の御難義幸ひあたりには小石もあれば最期の用意をさうぞやく(ト蝙蝠傘を鉄柵に立掛け身構へして橋の上へ来り) 千「南無阿彌陀佛」ト飛入らうとす

る此内向ふより御前吉走り出て來り抱き留め」 御前吉「コレお茂世ママ待つてくれ餓鬼もゐるのに何でこんな真似をしやアがるのださうして傘は何處へやつた持つて來たか早く聞かしてくれ」 千「イ、エ私しやそんな名の者ではあり升せん死なねばあらぬ譯あつて死ぬる者でムリ升から何うぞ放しておくんない」 吉「成程聲は鳴アと違つて居れど何にしても目に掛つたからは捨殺しには出來ねへからママ待なせへ○さうしてお前は何處の人だへ」 千「ハイ私は柳橋で常盤屋お千代といひ升して賤しい勤め家業をする者でムリ升」 吉「夫じやア藝者だ何にしても何ういふ譯で死なさるのか知らねへが實はわつちの噂アめも書置をして出やアがつたから殺しちやア可愛想なり又殺されねへ譯もあるから跡を追駈け來た所南無阿彌陀佛の聲がするから何でも噂アと抱き留めたがモシヤお前さんと同じ様に身を投げた者はなかつたらうか」 千「サア何うでムリ升か」 吉「モシはお前さんの下駄かへ」 千「イ、エ」 吉「サ、そんなら噂アはモウ死んだか」 千「エ、」 吉「飛んでもねへ事をしてくれたぢやア」 千「何ぞ譯も存じ升せぬがそんならわちたのお神さんにと私と同玄様に身を投げて」 吉「サアこんな事をお聞かせ申もお耻かしいが子細あつてわつちと旅へ出て居やした其留守に噂めは地獄をして居やアがつてけふ戻つて來て夫がばれ濟まねへと思ひ死ぬ氣にあつたものと見へ今も申た今夜の仕宜跡に残つた

餓鬼が可愛想ですがさうしてお前さんは何で又死なうといふ氣になりなすつたか」 千「其譯といひ升のは此身に義理を立通し操さんといふお方が結婚を嫌ふて下さんす斗りてなく兄さんの命迄かばふて下さんす御深切其嬉しいに引替へて濟まぬと御恩のお主の御難義夫故兄さんの罪を此身に引受け死なねば双方納り升せぬ故」 吉「さうでもあらうが死なすとも納りも附くたらうから歸りなさい」 千「イエ、夫でも」 吉「ハテ送りながらわつちが話しを聞升せよ」 千「兩人上手へ這入る向ふよりお類れ龜出て來り」 吉「けふ淺草公園で見掛けたお千代といふ女の行衛を見届け様と思ふたにツイ見失ふて此様に遅ふなり升たがモウ橋迄参り升た」 吉「車屋もあらぬ所を見ては餘程更けて居る様じやあ」 吉「サヤモシ爰にこんな傘が」 吉「本に夫は落し物であらう程に派出所へ届けたがよいわいなア」 吉「アレお嬢さんは慾を知らぬ事を仰しやる持つて歸つてさし升せうわいなア」 吉「ト傘を開く申より以前の指環の箱落ちる」 吉「サヤ何か落たよ」 吉「トレ○こんな箱でムリ升よ」 吉「コレヤ神戸で豊田さんにお渡し申た私の指環然も名前が彫つてゐるわいのう」 吉「是には何か譯がムリ升せう豊田さんへも迂濶に仰しやり升な何の様さ目に合も知れ升せぬわいなア」 吉「然し不思議な事じやわいなア」 吉「ト橋掛りより六右衛門手代清助附添提灯を持出て來り」 六左衛門「先へ戻つて居ると思つた所宅へも歸つて

らぬとは誠に心配な事だ清助急げ」 清助「畏り升た〇サ、そこにお出なされるは神戸のお
 嬢さんではムリ升せんかお龜さんと一所にモシ旦那様爰にお出でなさい升た」 六「サ、
 お類さんか」 類「左様仰しやはる豊田さんでムリ升か」 龜「モシ旦那さん今日は多らい
 目に合ひ升たわいなア」 六「イヤモウ手前も公園でいぐれたさう今に行衛が分らなかつ
 た故又出直して尋ねに参る所先づ無事で重疊くサアお類さん」 類「お供致すでムリ升
 せう」ト御前吉お千代出て来り」 御前吉「お千代さん危ないせ」 お千代「ハイ有難う」
 六「何お千代とは」 類「若しや最前の」 六「エ、ト提灯を差出すを御前吉撲ら落
 じお千代の手を引ツカ」と花道へ行く橋掛より巡官清川清水入りの着附のお茂世を連れ
 出て来り」 遊「怪しい舉動は」 お茂世「コリヤ爰にトお千代の書置を拾ひ見て」
 遊「書置が」 遊「エ、ト」此模様宜敷く涙の音にて拍子幕

大詰

役人替名

- 一笑 浦吉三郎 一牛肉屋 茂兵衛
- 一人 力車夫 虎松 一花 賣松右衛門
- 一吉三郎 女房お茂世 一吉三郎 悴吉之助

- 一近 藤貞介 一中 西東作
- 一巡官 瀧川清 一豊田 六左衛門
- 一藝者 お千代 一下 女お龜
- 一小 松操 一雇 婆々お染
- 一南 喜太郎 一巡官 美濃吉松
- 一玉 田娘お類 一探 偵三上糺
- 一箱 丁 衆吉 一汁 粉屋善平
- 一豊田 手代 清助 一酌 人お菊
- 一巡官 左海深見

柳橋お千代内の場

本舞臺見附上手より延喜柳重簾筒唐紙鼠壁に三味線を掛わり上手障子家体下手入口名前と
 記したる御神燈の提灯上の方に長火鉢都て藝者内の模様爰に雇婆々お染衆吉門口に花賣松
 右衛門荷をおろし居る此模様二挺鼓の稽古唄にて幕明く」 衆吉「朝つばら此裏も願々敷
 い裏だなア」 お染「隣りに稽古のお師匠さんがあるもんだからサ」 松右衛門「モシ伯母
 さん柳之内へ入れて置升よ」 衆「ア、其水瓶の上へ置ておくれ」 松「插花は何うでム

千「夫は御深切に有難うムリ升そりやモウ二百圓々四百圓でも私の手から調へてお救ひ申
て上げ升せねば濟まぬ義理でムリ升故實は今持たしてやつた手紙といふは其金を渡し申
さう其爲に操さんを迎ひの手紙」 東「ム、さうか流石は目下柳橋で名を知られたる歌妓程
わつて假初にも二百圓情夫の爲めに調へて」 喜「其困難を救はんどの精神は實に感服恐
入る」 千「アラそんな事を仰しやつて下さり升ては顔から熱い汗が出升よ」ト向ふて」

喜「サア操さんね出ささい舛せよ」ト向ふより小松操手紙を開き見なからお菊袂を引張り
出て來り」 小松「此手紙の様子はさきのふ公園での話しを聞き調金したとの知らせの手
紙此苦勞をさせまいと思つて居たに先さへ知つての此調金何時に替らぬ彼れが深切では
違ふて禮をいはねば」 喜「夫じやに因てお出なさいよ」 小「ハテ行くといふに」ト舞
臺へ來り」 喜「モシ姉さんあなたのお嬉しいお方をお連れ申升たは」 千「誰だへ」

小「兩君濟ない事をした大きに失敬」 千「サア操さんですかあなたたんと他人行儀な事
をなさい升せ」 喜「然りく是はいふべし」 小「イヤ君笑談ではない僕も是迄お
千代にこ一方ならぬ世話になり」 千「アレサそんな事を仰しやつては否ですよ此儘な心
配するに私の役ではわり升せんか一寸待て下さいよ」ト延喜棚より前幕の服紗包みを取り
來り」 千「モシ操さん差追つたる二百圓何うぞ是を伯父さんにお返しなすつて下さい升
せ」 小「何にもいぬエレお千代是で此身の顔も立ち恥もかぬといふものだ此恩計り
は忘れとせぬ〇兩君失敬」 東「コレ君何處へ行くのだ」 小「イヤ君達にも話した通
り出來ぬと知つての催促は僕を困らす伯父の難題其金が入つたればらつとも早く持參
して伯父の横面へ叩き附けていねばならぬ事がある」 千「ア、モシ操さんちよつと待
つて下さい」 小「何ぞ用か」 千「あなたお出なすつて其お金を戻せばとて決して何と
もおつしやつてはいけ升せんよ」 小「デモいふべき事はいとなければならんじやないか
」 喜「デハ小松君僕等も道途同行仕様」 千「夫ではあなた方もお歸りでムリ升か誠に
お粗鹿様でムリ升たお菊ちゃん向ふへ車屋が往くから呼でおくれ」 喜「ハイ車屋さん」

千「夫ではあなた歸りに寄つて下さい」 小「夫は寄るとも」 喜「サア行ち」ト三
人向ふへ這入る上手家体の障子を明け御前吉女の寢間着形りにて布團の上に腹這に寢て居
て」 御前「夕べの話しに違ひなく今のと體かに噂アの弟」 千「サアあなたモウお目覺
めですか」 喜「何うも寢坊には困り升なア」 千「イエあなた其筈ですよ夕べお歸りに
なつて出直してお出なすつたのは鶏が鳴てかり升たもの爰は隣りに稽古所があるので無お
喧しうムリ升せうが緩つくりお休みなすつて下さいな」ト貴を吸附けて出す」 喜「是は恐
入升ねへ」ト貴を喚み自分の着物に着替へる」 千「あなた今お爛が附升迄休んでおつて下

いさ」言「有難うムリ升が餓鬼の事も氣に掛るし又噂アの事もあり升からは是より回向な院へ往つて經の一つも上げてやりたうムリ升から」千「成程左様でもあり升せうが顔でも洗つて御膳でも上つてから往つて下さいいな色々あなたには」言「何ぞ用でもあり升か」千「ちうて何ぞ致し升せうモシ吉さんあなたにはお禮の申様がムリ升せんよ○夕べお話し申た仕宜で吾妻橋から身を洗め死うと覺悟致し升たをあなたのお蔭で助けられ爰の内迄御深切にも送つて下さい升た其節にお話し申た指環の事且は男の身に附てなくて叶はぬ二百圓夫故死ぬとの子細をばお聞なされて其指環も頼てあなたが尋ね出し兄の嫌疑も晴さうし又差當る困難の其金だけは内へ歸つて持て来て下さり升とて夜更も厭はずお内迄はお歸りになり升て持て来て下さり升たお金大枚二百圓今其人に金子をば渡して此身の義理も立男も耻をかき升せぬはみんなあなたのお恩といふものお名前だけは伺ひ升たがお宅は何處でムリ升か昨晚のお詞では何うか兄の貞介を御存じの様であり升が何ういふ御縁で御存否か其お話しも承り又お宅をもお聞申て置升せんと何れ金子を御返濟の節は」言「馬鹿な事をねいひなさん返して貰ふ金ならば何で再び悪事をば○イヤサ飽迄男の爲めに實意を盡すためへさんの志しを感じた故取りに歸つて渡した金おめへさんに上げたのサ又貞介さんといふ人も名計り知つて居る計りで別に近附といふでもなければ話す事も何にも

ないのサ」千「夫では猶更御縁のさいあなたに金子を受け升ては」言「ハテ商賣柄に似合ないそんな義理堅い事をいとすと夕べの金子は貴顯方の座敷へでも呼ばれて往つて貰つたと思つて下さり」千「何う致し升てあなたちつどのお金ではなし高と大枚二百圓夫をお貰ひ申といふ譯がないではあり升せんか夫故せめてお宅でもお聞申て置升せねば」言「夫は又今度来ていひ升せう」千「夫では何うも濟み升せんよ」言「ね千代さん大きに御厄介になり升た左様なら」ト向ふへ這入る」千「夫でとわんまり○アラモウ往つて仕舞たのだよモシ伯母さん」ト是にて奥よりお染出て來り」お染「何ぞ御用ですか」千「夕べお泊りのお客が今そこへ往つたから早く走つて往つて無理にお連れ申て来ておくれ」言「長り升た」千「サア早く往つておくれ」言「何ちへ往つたのだらうね」ト向ふへ這入る」千「夫にしてもけさ明方持つて来て下さつたお金と女の合財に入れたい包の服紗の儘私に渡して下さりした御深切は嬉しけれと形りにはちつとも似合はぬお金一体何處のお人だらうね」ト橋掛りより探偵三上糺出て來り」糺「御免○常盤屋のお千代といふところですか」千「ハイお千代は手前ですが」糺「お前さんに兄さんがあり升か」千「ハイ○イ、エ」糺「イヤ近藤貞介といふ兄がある筈だが」千「成程夫はある事はあり升が」糺「イヤあれば宜敷い」ト門口へ行き橋掛りへ領にて人を呼ぶこ

なし深見吉松兩人巡官の拵らへにて出て来る」 此常盤屋か千代の宅と愛です○此者です」 吉松「夫ではね前がれ千代といふ者ですかチト尋問の筋があるから警察署へお出なさい」 千「何ういふ譯で警察署へ」 深見「イヤ往つたら分る事だ」 捕縄を出す」 千「ア、モシ私をそんな目に逢ふ様な事は致し升せん夫と御免」 ト振り放すのが道具替りの知らせ」 千「なさつて下さり升せいなア」 三人「エ、神妙にしる」 ト腰縄を掛ける此模様宜敷く合方にて道具ふん廻す

兩國牛肉見世の場

本舞臺平舞臺真中牛肉店此上に牛肉を煮込みし鍋を掛けし火鉢を置き此下手汁粉店出し臺の上に大福餅を乗せし焼鍋下の方芳野と記るせま入口上手西洋造り日本風入交り町家の遠見都て兩國廣小路の模様茂兵衛牛肉屋亭主の拵らへにて牛肉を拵らへて居る善平汁粉店亭主の拵らへにて餅を焼て居る此模様辻打にて道具納る」 ト向ふより御前吉出て来り」 御前吉「追駈けられては面倒と道を廻つてやつて来たが僅か七年見ぬ内に兩國の勝手も違つたなア」 ト此時向ふにて」 虎松「ナイ」 御前」 ト向ふより人力車夫虎松車を曳き出て来り」 虎「そこへ行くのと御前ぢやねへか吉さんぢやアねへか」 吉「チ、さういふのも大久保の虎の珍らしい男に出會つたなアあのばり今以て車を曳てゐるのか」 虎「誠に

智慧のねへ話したが今ぢやコレ」 丹の方が皆無だから○だから車でも曳かにやア仕方がねへやな夫にしてもおめへ達者でいゝが君も阿古木な男だせ女房子を捨て置て今迄何處へ往つて居たのだお主しのお蔭ぢやアおれもひどい目に會つたせ」 吉「さうだらう店受を頼んで置た手めへだから無おれの留守中は厄介も掛けたらうが堪忍してくれ」 虎「何をや昔の友達だからおれの難儀は構ねへが可愛想にお茂世さんや子供の難儀はひどいものだせ」 吉「其女房にも忤にも夕べ逢つたよ」 虎「何處で」 吉「不思議な事から淺草の馬道で出逢つたが其噂アも今ぢやア此世に」 虎「エ」 吉「イヤ此頃に出逢はう」 虎「ナイ」 御前「マア待ちねへ其お茂世さんの事に附て話してもわり又妙な人に出會つたせ」 吉「そりや誰に」 虎「マア向ふへ往つて話すと仕様」 吉「さうか」 ト舞臺へ来りマア何にまでも久し振りだ片足上げての話しに仕様○ナイ丸二の親方一本つけてくんなせへ」 茂兵衛「チ、虎さんですか畏り升たト」 内へ道入る」 吉「イヤ虎坊ぢればまだ顔も洗はず回向院へ迄往かにやアならねへからけふは預けにして置うがさうして妙な人に出會つたとはやつぱり昔の友達か」 虎「ナニおめへの奥さんの弟御に逢つたのよ」 吉「ム、あの小松操にか」 虎「さうよ今一ぱい仕事をして柳橋の裏河岸をふら」 戻つて来た所急ぎで乗せたは操さん此車にて小梅の豊田といふ内迄送つて今歸りがけよ」 ト御

前吉恠りして」 吉「何だ小梅の豊田といふ内へ弟の操を乗せて往つた」 虎「ム、おめへ豊田を知つて居るか」 吉「知らずくつて何うするものか夫は夕べおれが盗みに」 虎「エ、」 吉「イヤサお主しは其内へ操を乗せて今戻つたといふが若しや豊田といふと元青山に居たおれの噂や弟の伯父で豊田六左衛門の内玄やアねへか」 虎「さうだよ」 吉「夫ぢやア豊田といふものは伯父の豊田の内であつたかシテ見る時その金を持つて往つた其先きと〇こいつア飛んだ事になつたぞ」 虎「茂兵衛出て来り」 茂兵衛「モシ虎さんお爛が附き升たこちらへお這入りなさい」 虎「さうかそいつア有難へ〇サア御前酒が附いたといふから一盃やらうよ」 吉「イヤ、今の話しを聞ては猶々酒所の事じやアねへ」 虎「何だない、じやアねへか何んを譯か知らねへがマア一べへやんねへな色々話しもあるからサ」 吉「イヤ其話しも聞ちやア居られねへ」 虎「ハテマアいゝてへ事よ」 虎「無理に店へ引張り込む」 虎「いらつしやい」 虎「内へ這入る向ふより貞介吉之助の手を引て出來り」 吉「聖伯父さんおつかさんは本統に死たのかねへ」 貞介「サア夕べの書置では何うかそんな事をした様子だがあんな親仁のいふ事をれば何をいふか分るものか」 吉「其おとつさん何うしたのだらう何處へ往つたのだらうねへ伯父さん」 貞「其親仁を掴まへねばこつちもならぬ事がある故いは、お前を人質に妹の所へ連れて行き夕べの始

末を話したなら爾此身の疑ひも晴れると思つて出て來たがお互ひにまだ朝飯前吉ちやん腹がすいたであらう今妹の内へ往つたらたべさすから夫迄向ふに大福餅があるあれでもたべて辛抱をしてくんよ」 吉「イエ伯父さん私しや何にも入らないよ」 貞「マアそんな事をいはないで」 虎「舞臺へ來り」 貞「モシ大福餅を此子にやつておくんよ」 貞「善平」 是はお出なさい鹽に致し舂せうか」 貞「イヤ子供の事だから甘い方がよからう〇サア吉ちやん是をおたべ」 吉「大きに有難う」 虎「餅を喰ふ上より糺お千代に繩をかけ吉松深見附添出て來る貞介見て」 貞「サ、」 貞「お千代」 貞「ト貞助詞をかけやうとするをお千代いふなど目顔で知らせ向ふへ這入る」 吉「伯父さん今縛られて往つたのはきのふお前の内へ來た姉さんだねへ」 貞「サア何の科で妹が拘引されるかア、案じられた事だなア」 虎「ト向ふよりお染走り出て來り」 貞「お染」 貞「お前さんはお千代さんの兄さんではムリ姉せんか」 貞「さういふは妹の所のお染さん今お千代が引かれて往つた何の科で」 貞「サアお聞なさい私は今尋ねる人があつて愛らもうろくして居た所其人に逢ひもせずお千代さんに逢つて見ればレコでせうがね〇サア私も恠りしたではあり舂せんか是はマア何うした事を尋ねて見ればきのふお前さん所へ出舂た時お隣りへ預けて置た蝙蝠傘を何ういふ譯か吾妻橋の詰へ忘れて歸り舂た所其中に金剛石の金の指環があつたさうて其品は

お前さんが神戸で受取て来た品とやら所が其傘を拾つた人は其品の主しで小梅の豊田といふ内に居る娘とやら又其傘には名前が書てあつたので夫が證據でお前さん方兄妹が慣合ふて掠めたものと豊田から告訴に據て引かれたといふ事ですが何にしても捨ては置かれ舛せん(ト上手へ這入る) 真そんなら夕べ此子の親が神戸で盗んだあの指環を蝙蝠傘の中へ隠して置たといはれたが夫で様子がすつかり分つた何よしても斯うしては居られぬわい」
 吉之「伯父さん何處へ行くのだへ」 真「小梅迄行かねばならぬ吉ちやん」所に來てく
 んち」 吉之「アイ(ト貞介脊負つて向ふへ走り這入る御前吉店より出て來り) 御前吉」
 夫ぢやア夕べ指環をばおれが隠した蝙蝠傘とあの女の傘であつて廻りくつてあのお千代に思われ災難が掛つたのか○コリヤ彌捨ては置かれぬわい(ト虎松出て來り) 虎松「ナイ吉さん能く何も角も打明して話してくれた夫でこそ友達甲斐があるといふもの小梅へ行くなら此車に乗つて行ねへおれが曳て行くから」 吉「夫ぢやア氣の毒だがやつてくんねへ」
 虎「合點だ(ト車に乗せ花道へ行く茂兵衛出て來り) 茂兵衛「ナイ車屋さん勘定は何うするのだ」 虎「篋棒め夫所の騒さぎやアねへ○御免なさい」(ト向ふへ這入る) 茂「陰逃げだ」(ト跡追駈けて這入る)此模様宜敷辻打にて道具女ん廻す

小梅村別荘の場

本舞臺半舞臺見附上の方大床是に楠公櫻井の書軸を掛け菊を活けし花瓶を据へ下手及上下折廻しの襖都て小梅村豊田別荘の体爰に六左衛門お類を留て居るお龜大カバンにお類の衣類を詰て居る此模様合方にて道具納る」 六左衛門「サア腹も立うがお類さんマアさういはずと」 お類「イエ」所詮私の様な足はぬ者は操さんの御意に叶ひさうな事がムリ升せぬ夫ぢやに因て夜前料らす吾妻橋とやら申所で手に入り升たる彼の指環も操さんより藝者のお千代へお遣はしになつたものでムリ升せう」 「お龜そんなあなた阿房らしい事がムリ升せうかいサアお嬢さんはでお荷物も宜敷うムリ升れば早う神戸へお歸りなされ升せこんち所におり升たらとんち目に合ふも知れ升せぬといふア」 六「イヤマア待て貫おねばならぬ○コレ清助お居ぬか操の所へ遣つた使はまだ歸らぬか(ト橋掛りより清助出て來り) 清助「旦那様操様がお越してムリ舛る」 六「何だ操が來たあの糞野郎め伯父を是程困らすもみんなあいつ故といふものはへ呼べ」 清「畏り舛た(ト引返して這入る下手より操出て來り) 眞「伯父さん昨日お失敬を致し舛た」 六「チ、操か是へ來い」(トお類さんは此通り今神戸へ歸るといふてな着替の衣類をカバンに詰てじや○おたいらぬが賊婦に鼻毛を伸して居る馬鹿だから) 眞「賊婦とは誰ですお千代の事ですか成程

彼女とは約束をした事が有り、舛から伯父さんの仰せには随へ舛せぬ昨日あなたの仰しやつた通り御恩金の二百圓是さへお返し申たら言分と有り舛まい」
 六「スリヤ此金子六左衛門へ返すといふか」
 七「堪いかに」
 八「何うしてそちが此金を」
 九「夫はお千代が調達してくれ舛た」
 十「スリヤおのお千代が」
 十一「あなたは賊婦など、仰しやり舛が僕の爲めには心底者捨られる女では有り舛せん伯父さん左様なら」
 十二「ア、モシ操さん一寸お待下さり舛せ」
 十三「何か用ですか」
 十四「失敬ながら操さん只今の金子をね入れになつた合財が拜見致し度うムリ升」
 十五「是ですか」
 十六「合財を出す」
 十七「ね、是を御覽」
 十八「是はお嬢さんのお金入」
 十九「ア、」
 二十「是は的切り此賊もね千代といふ女の仕業にお嬢さん違ひとムリ舛せぬわいなア」
 二十一「イヤハヤ太いあの女めヨリヤ操夫へ出よエ、出よといふに」
 二十二「あの女の仕業といふは此金斗りの事ではないぞ夕べ此お類さんが吾妻橋の詰で拾つて戻つた蝙蝠傘は柳橋常盤屋お千代と名前を記した其傘に入れであつたは紛失したる彼指環とちよりお千代に贈つたか但しは兄の貞介より貰ひ受けたか知らぬとも遁れぬ證據と蝙蝠傘其上金迄奪ひし大賊太いといふにも程があるわい」
 二十三「ト橋掛りより貞介吉之助の手を引出て來り」
 二十四「貞介、且那樣御機嫌宜敷うムリ舛るか」
 二十五「操、ナ、そちは貞介」
 二十六「賊めうせたかコリヤ清助繩を持って」
 二十七「貞サ、其お詞は御尤で

はムリ舛れど敷居の高い此お内へ参り舛たも只今仰せの指環のお詫びが致したさ決して逃げは致し舛せぬ如何様とも御存分に遊ばして下さり舛せ」
 二十八「せいであらうか能くもおのれ指環をば」
 二十九「貞サ、其お疑ひは御尤でムリ升れど右の賊は此小兒の親の仕業でムリ舛故是へ同道致し舛たも身のお詫びを致さう爲め」
 三十「何と申」
 三十一「且那樣一通りお聞なされて下さり舛せ」
 三十二「先達で且那樣のお供を致して神戸へ参り然も楠公社内にてお預り申たる指環を賊に奪はれたる申譯には死なうと迄覺悟を致し舛たが操様のお詞に隨ひ命長らへかり舛たる其甲斐あつて昨晚料らず出逢ひ舛たる其賊は此子の親で名前をば吉三郎と申者指環を戻しに來たとは申せど終に其者を取逃し残念ながら右の様子を妹お千代へ申さうと兩國迄参つた所妹に之警察署へ拘引された子細をば聞けば右の指環が出舛たる蝙蝠傘が證據となり告訴をなされ舛たとの事夫と聞て捨置れず直ぐにお詫びに出舛た所又もや金子のお疑ひ是は妹めが仕業かは存じ舛せぬが指環は全く私の鹿相にて妹お千代之知らぬ事何うかお慈悲を以升て是だけの疑ひは晴らしてやつて下さり舛せ此私は何うなり舛せも落度があれば是非なれどあれが身には露聊か犯せし罪とムリ升せぬ」
 三十三「だまれ貞介其罪を犯さぬ者が何で所持の蝙蝠傘に其指環を隠してあつた」
 三十四「夫が一圓合點が参り舛せぬがシテ其傘は何うしてお手に入り舛た」
 三十五「夫は昨晚吾妻橋で拾つて見れば私よ

り贈りし指環があり舛た故持歸りて豊田さんへお話し申たのでムリ舛る」 貞「スリヤあ
きたがお拾ひなされたのでムリ舛るか」 龜「ハイ私が拾ひ舛た」 操「其指環は是であ
るが貞介そちも見覺へがあらう」 貞「へい是に違ひはムリ舛せぬが何ういふもので此指
環が」ト橋掛りより御前吉出て來り」 御前吉「豊田様にも操さんにも一別以來御健勝にて

六「ヤさういはるゝと笑浦殿の三男」 操「吉三郎殿」 吉之助「おとつさんか」 貞
モシ旦那指環の賊と此者でムリ舛る」 六「スリヤ指環の」 昔々「賊といふは」 吉

誠に面目もなき吉三郎が身の成果六左衛門殿を聞下されい○若氣の誤りとはいひながら貴
殿の爲には姪にして操殿には實の姉お茂世と道ならぬ契りを結び連れて逃げたる身の不埒
夫のみならず是なる悴を儲けし年に逃亡なしありとあらゆる悪業を働かし上神戸にて窃み
取たる其指環も不思議に櫻井の古跡に於て是なる床に掛けたる軸の夢を見たが心を改むる
基となり直ぐに東京へ立歸り昨日料らず淺草の公園にて是なる悴が貧苦に迫つて窃み取り
し服紗の中其金高は二百圓にて然も主しと是をる女中其節所も聞たれど六左衛門殿のお宅
と知らず盗みに這入りし其金と操殿が持參せし返濟金の二百圓又お千代の拘引されし様子
を聞けば昨日是なる兄の方へ行きし時隣家に住う我女房お茂世の宅へ蝙蝠傘を預置きたる
其傘の中よりして出たる指環の嫌疑を受けしお夫こそ我入れ置きたる傘にてお千代の知ら

ざる時の災難唯何事も御免下され」 六「スリヤ貞介兄妹の仕業とのみ思ひおつたる」

操「指環も君の仕業にて」 貞「夜前紛失致し升たる夫なる金子もさのふ料らず」 龜

公園にてね世話になつたおわたの仕業でムリ升たか」 貞「何と旦那様是では貞介兄妹の仕
業でとムリ升まい」 六「誤つたゝ皆おれが悪かつた了簡してくれ」 吉「夫に附ても

不便なと女房お茂世書置残して昨夜の家出」 六「操」 吉「吾妻橋から入水とある故
跡追欠けしが間に合はず」 六「夫では已に死んだのか」 操「死骸は何れへ漂着せしか

何れ新聞で分るでせうが誠に残念な事を致し升たねへ」ト上手家体より巡官瀧川清平服に
て出て來り」 六「イヤお案事なざるな其お茂世さんと存命です」 操「さういふ君と瀧

川君」トお茂世出て來る」 吉「チ、そちはお茂世」 吉之「おつかさんね前生て居てくれ
たのか嬉しいい」 六「お茂世」伯父さんにも弟にもお目に掛るは面目ないわりし昔の此身の

不埒夫を思へば中々愛へ出られる身でとムリ舛せぬが瀧川さんの仰せに隨ひ願押拭ふて參
り升た」 六「イヤ夫は昔の事で仕方がないが何うしてお前は助かつた」 清「夫と斯う

うです夜前僕が巡回中吾妻橋にて較多の人聲身投げと騒々を助けて見れば手習ひ朋輩のれ
茂世さん實に僕も驚き升たが宅へ泊めて様子を聞けば笑浦君に濟まない事があつての身投
げと由事です」 茂「サア夫も夫の留守の困難に止を得ず客を引さ」 清「ア、イヤさう

でこゝろをい夫と何かの間違ひでせう」 茂「イエ、夫ある身の上なれば肌身こそ汚さねども」 操「スリヤ姉さんには」 皆「淫賣を」 言「其罪を犯したも元とといへど我科なり殊に遁れぬ盗罪あればサア引下され」 清「誠に二人の精神には僕も感服致すのみか竹馬の友を拘引するは忍び難き事なれどお覺悟といひ我職務如何にも拘引致し升せう」 言「只此上の願ひといふと親心斯る者あれどもせめて悴は軍人となし楠公父子の忠節に之固より及ばぬ事なれども御國の爲めに御奉公致させたいが操殿を取計らひ下さるまいか」 操「伯父甥の縁故を以て幼年學校へ入れ及ばすながら此操が教示致して行々は士官とも致すであら升せう」 言「夫さへ聞けば跡々に心残らぬ吉三郎夫に附ても夕べ料らす吾妻橋にて助けたるれ千代の入水」 茂「夫にて思ひ合とし升るは私が拾ひ升たる此書置伯父さん篤くり御覽なされ升せ」 言「サア繩打て下さり升せ」 清「然し僕は繩を持たねば」 太「イヤ其繩なれば此女中か荷拵らへの此細引」 清「御當家より繩附を出すも氣の毒な事ながら止むを得ざる職務執行」ト繩を掛る」 言「夫ではおとつさんも監獄へ行かねばならぬかへ」 言「親こそ楠公には似も寄らねどもちだけは小楠公正行といふ彼書に書た人の様に成てくれ是だけが親の頼みだヨヨ」 眞「ア、此貞介の鹿相がなくば今のお身にもなるまいもの」 言「イヤ夫が本心に立歸る種となり」 清「官の處刑を

受んどの自訴も性は善なるもの」 操「其原因は楠公の忠義に感せしものとやら」 六
夫を思へば 皆「々」忠臣は」 操「實に國の」ト膝に手を置くのが木の頭 皆「寶です
なア」ト此模様宜敷く合方にて拍子幕

明治廿六年十一月廿八日印刷
明治廿六年十二月四日發行

(定價金八錢)

版及發行所
權興權有

著作兼發行者

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷
勝 諺藏事

勝 彦兵衛

印刷者

大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷
周擴合資會社

前田 菊松

